

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和8年1月16日

埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

令和元年度～5年度までは保毒虫率が減少傾向にあり、今年度は保毒虫率が過去10年で3番目に低くなっています。ただし、縞葉枯病抵抗性を持たない品種において感受性が特に高い時期にヒメトビウンカが多数飛来しやすい作型(コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培)の作付割合が高い地域では、保毒虫率がかなり高い地点があります。

イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の予防対策を徹底してください。

1 調査方法

令和7年10～11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度／1か所)し、ELISA法により保毒虫を判定し(写真2)、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫
(体長2mm)

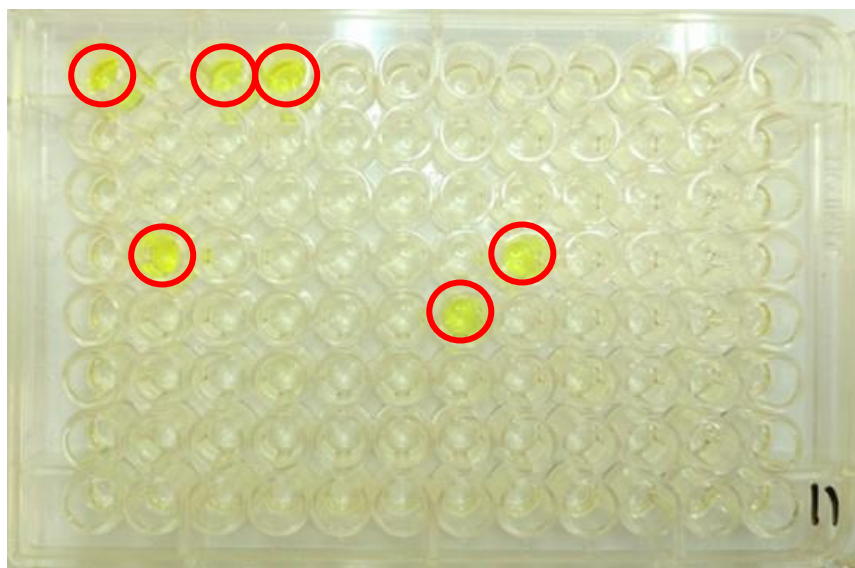


写真2 ELISA法による保毒虫判定結果

ウイルス有り：黄色に発色(○内)、ウイルス無し：発色せず

2 調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあり、令和7年度は平均で3.0%と過去10年で3番目に低くなった(図)。ただし、保毒虫率0.0%の調査地点は2か所と昨年度(7か所)より減少しており、特に5月中旬までの移植が主体の地域では全調査地点で保毒虫率が1.0%以上となった(表)。

昨年度は移植時期による保毒虫率の差は見られなかったが、令和7年度はコシヒカリ早期栽培地域を主体に5月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が高い傾向が見られた。ただし、5月下旬以降の移植地域でもキヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率が高いこともあり、作期による統計的な有意差はなかった(表)。

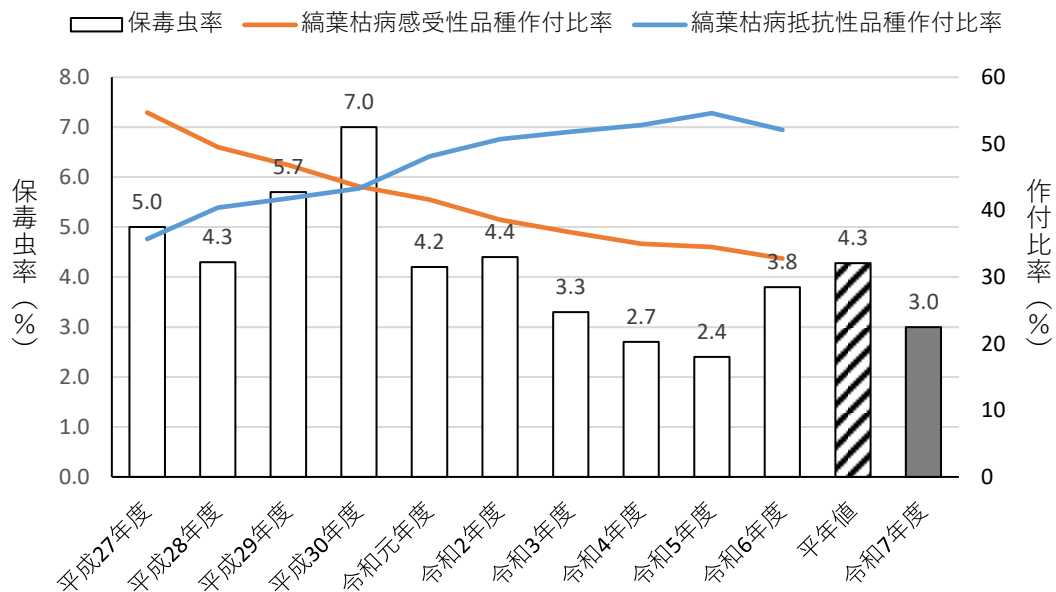


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

表 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率(令和7年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域	
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)
さいたま市桜区昭和	5.2	坂戸市横沼	2.1
鴻巣市屈巢	1.0	小川町高谷	2.1
富士見市南畑	2.1	嵐山町杉山	1.0
川越市南田島	2.1	秩父市小柱	2.1
川島町出丸中郷	2.1	本庄市児玉町吉田林	3.1
吉見町西吉見	16.7	美里町阿那志	2.1
熊谷市中曽根	1.0	上里町長浜	0.0
加須市大越	2.1	熊谷市中恩田	3.1
加須市柏戸	1.0	熊谷市御正新田	6.3
春日部市八丁目	3.1	行田市前谷	4.2
幸手市神扇	4.2	行田市下池守	0.0
杉戸町大塚	5.2	加須市下谷	3.1
		久喜市菖蒲町台	1.0
地域平均(12地点)	3.8	地域平均(13地点)	2.3
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	3.0

NS